

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷六十二第

行發日一月二年三和昭

## 論叢

- 損益勘定に關する一考察 . . . . . 法學博士 上野道輔
- 法人重複課稅立法の分析 . . . . . 法學博士 神戶正雄
- 利潤成立の機構 . . . . . 文學博士 高田保馬
- 社會黨の農民獲得運動 . . . . . 法學博士 河田嗣郎
- 長崎貿易に於ける銅及び銀の支那輸出に就いて . . . . . 文學博士 矢野仁一

## 說苑

- 重農學派の純收入論 . . . . . 法學士 山口正太郎

## 雜錄

- Fairplay 誌の批評に應ふ . . . . . 經濟學博士 小島昌太郎
- 德川時代の漁民騷動 . . . . . 經濟學士 黒正巖
- 紐育倫敦兩資本市場の爭鬪 . . . . . 經濟學士 松本佳三
- 營業收益稅の改正法案 . . . . . 經濟學博士 沙見三郎

## 法令

商工會議所法施行令

重農學派の純收入論

山口正太郎

一 重農學派と經濟表

フキジオクラティイなる名稱が初めて用ひられたのは、——此派の有力なる研究家の一人、<sup>1)</sup> Schelle によれば——Du Pont de Nemours によるとある。オンケン<sup>2)</sup>は之に反對し、更に半年以前、即ち一七六七年四月發行の“Ephémérides”誌上二二二頁に、Abbe' Baudeau が「諸政治の原理」なる論文にフキジオクラティイの名稱を使用してゐる事を述べ、更に又「フキジオクラティイ」と題するケネーの多くの論文を編輯した單行本の第一卷と第二卷との合本が——一七六八年刊行とあるが——既に前年の十一月に出版されてゐた事情を述べ、<sup>3)</sup> 以てデヌ、ボンが此名稱の創唱者なることを否定してゐる。

抑も Physiocratie なる語は、自然 phusis と政治者 Kratesin の連結たる自然の政治 tes phuseos

1) Schelle, (Du Pont) de Nemours et l'Ecole physiocratique. 1888. p. 3.  
 2) Oncken, Geschichte der Nationalökonomie. 3 Aufl. 1922. S. 334, 335.  
 3) Oncken, Oeuvres Economiques et Philosophiques de Quesnay. 1888. p. 696, 697. note.

Fraticis から出たものである、此派の根本思想は自然の攝理、自然の秩序を政治の最高原理となす事であり、延いて經濟上にも最も自然の秩序に依據する事多き農業を以て唯一の生産業となし、「農夫貧しければ國貧しく、國貧しければ王貧し」*Pauvres Paysans, pauvre royaume*、*1-pauvre royaume, pauvre roi* の標語を掲げ、他の商工業を以て生産業と認めず純收入 *Produit net* を生ぜざるものとするものである。従てフキジオクラティを邦譯するに第一義を採れば天則學派、天理學派と云ふが至當であるが、經濟學的考察に於てはアダム、スミスが此派を *Agricultura Systems* の章下<sup>4)</sup>に包含したる如く、特に農業を重んずる點より重農學派とするも不可なき如く考えられる、以下フキジオクラティを示すに重農學派とする。

此派の根本思想たる自然の秩序とは如何なるものであらうか、そは明かに人間の意思に基く人為的社會秩序に正反對なるものと考えられるが、少しく進めて考察する時は種々の疑問を生ずる、もし自然の秩序を以て人為的文明の状態に對する自然の状態と解する時は此派は復古論者の如く、文明を排し、自然状態に復することを主張するやに思はれる、乍然此派の主張は人為的社會秩序を排するのではなく、寧ろ自然の秩序を基礎として、それに基づける社會的秩序を自ら建設せんとするものである、自然の秩序と社會の秩序とは相排斥し合ふものではなく、上下の關係、即ち基礎と上建築との差こそあれ、兩者は同時に存在し得るものである、此派が財産の安全と自由との社會秩序を主張し、人類が野蠻状態より人為的文明状態に進むを毫も否定せないのは自然の秩序と社會的人爲的秩序とを相排斥し合ふものと見ないからである。

4) Denis, Histoire des Systèmes Economiques et Socialistes. 1904. p. 68.

5) Adam Smith, Wealth of Nations. Cannan's ed. vol. II. p. 161. ff.

次に自然の秩序を以て自然法則が人類社會を支配することを意味するとの考がある、此派の代表的學者たるフランソア、ケネーが當時の名醫としてルキ十五世の侍醫となり、ベルサイユ宮殿に侍してゐたこと、又彼が幼時より自然科学に興味を有し、數多の著書論文を公にし、殊に人體内の血液循環の理法より類推して、彼の有名なる經濟表の財の循環を考え出したと云ふこと等から此派は自然法則を以て人類社會をも支配せしめ、此状態の下にあるを自然の秩序と云つてゐるかに考えられる。乍然此派の人々はジード教授が指摘せる如く、社會有機體論者でもなく、又決定論者 *deterministes* でもなく、又蟻や蜂の社會と人類の社會とを同一視する論者でもなく、却て人類社會の不秩序、混亂、乃至不合理性を是認せるものである。

然らば此派の所謂自然の秩序とは如何なるものであらうか、抑も人類社會を規制するものに自然の秩序と人爲の秩序とがある、此兩者は相反するものではなく、後者は前者に基くことによつて初めて正當な秩序たり得るのである、自然の秩序とは人類の幸福のために神によつて欲せられたる秩序である、所謂神慮に基く秩序である、此秩序は人類社會の興亡盛衰に關係なく、根本的に存在し、人々の叡智によつてのみ認められるものであり、人類社會に最上の幸福を齎すものとして人々の努力を要求するものである、乍然此秩序には拘束力はない、之を守ると否とは人々の自由意思に委されてゐる、此秩序を基礎として人爲の秩序が成立する、此人爲の秩序は一時的で恒久性を有つものではなく、其時々の実際状態に應じ之を規制するに止まる、正義とか倫理とかは前者の發露であり、法律は後者の具體化である、ケネー自身の言葉によれば「正義(自然の秩序)は

6) Schelle, Le docteur Quesnay, 1907, p. 91.

7) Gide et Rist, Histoire des doctrines économiques, 3 éd. 1920, p. 8. 9.

自然の、而して又最高主權の規制であつて理性の光によつて認められる、それは自己に屬するものと、他人に屬するものとを明瞭に決定する」ケネーは從來の國家學說が人爲の秩序の方面の研究に止まり、自然の秩序を顧ざるを難じ、それは畢竟真理の一面を捉えたるに過ぎず、未だ全面を把握するに至らずとなして、さて曰く「國民は政府が明瞭に最完全に構成される處の自然の秩序の一般法則を教えられざるべからず」と、由是觀之、自然の秩序は人類社會の理想的秩序であり、人爲的秩序は個々の場合を規制する實踐的秩序である、人爲的秩序は自然の秩序を背景とし基礎として成立し、相補ふ性質のものである、自然の秩序を斯様に解釋して來ると、それはケネー又は重農學派の人々の創唱する處でなく、遠くプラトールが理想國家 *Politeia* と實踐的法律國家 *nomoi* とを分ち、聖アウグスチンが *civitas Dei* と *civitas terrena* とを分つた思想が思ひ出される。

抑も此學派の形而上學によれば世界の本質は物質と精神との二元である、然も此二つは受動的であるから、更に第三の要素として運動 *mouvement* が必要である、此運動は神から與えられた唯一の宇宙の活動原理である、人組にあつては理性を通じて此活動原理が作用するのであつて、理性は有益なりや否やの見地の下に、感覺に入り來つた雑多のものを判斷する、感覺は自然の認識の唯一の根源である。さて人類と動物との差異は、後者は現實の世界に生けるのみであるが人類は現實世界と彼岸の世界との二つに生けるものである、現實世界は明證 *evidence* により彼岸の世界は信仰 *foi* によつて知られる、神の存在は、我々の内外に作用する力であつて、然も人類の意思を離れて存在する、此力を考察することによつて微か乍ら神の存在を知ることが出来るが、

8) Quesnay, Le droit naturel, Oeuvres. p. 365.

9) Quesnay, Maximes générales. Oeuvres. p. 331.

10) Quesnay, Evidence. Oeuvres. p. 793.

11) Quesnay, p. 780.

その本質は我々の認識の範圍外である、<sup>12)</sup>以上はケネーを中心とする此學派の形而上學であるが、更に一步を進めて彼等の倫理觀を見れば、彼等は先づ意思の自由を中心にして置いてゐる、自由とは氣儘と異なる、氣儘は動物的自由であつて人類を動物に墮落せしむるものである、人類行爲の動機は二つに分かれる、一は感覺的動機で、他は理性的動機である、前者は動物の本能に當り後者は人類をして超現實的な方と結合せしむるものである、人々は此二種の動機に従ひ意思を自由に決定する、乍然此自由を制限する義務に三つある、一は神に對する義務で、二は自己に對する義務、三は他の同胞に對する義務である、<sup>13)</sup>此義務の遵守が即ち倫理である。猶ケネーによれば無智は總ての罪惡の根源である、無智こそは恰かも一の犯罪を構成するものである、從て凡ゆる手段を以て無智を除去せねばならぬ、小兒と痴呆と精神耗弱者とは意思の自由の範圍外に置かねばならぬ、<sup>14)</sup>同じことは又、自然の秩序を故意に破る者にも當て筈である、國家は成法を以て此種の犯罪者を罰し社會の安全を保持せねばならぬ。<sup>15)</sup>以上を以て重農學派の根本思想たる自然の秩序、及び形而上學の大體と倫理觀とを概括し了たと信する、次に本論稿の主要目的たる此派の經濟學的思想に移らうと思ふ。

重農學派の經濟學的思想を最もよく代表し、且つ簡潔に一つの表に示したものはケネーの經濟表 *Tableau économique* である、此經濟表はミラボーをして世界の三大發見の一つと賞讃せしめたものである、即ち一は文字の發見であり、二は貨幣の發見であり、三は經濟表の發表である、<sup>16)</sup>オンケン編纂ケネー全集に收むる處のデヌ、ボン、ド、ヌムール執筆 *Ephémérides du citoyen* —

12) Quesnay, p. 765.

13) Quesnay, p. 796.

14) p. 761. 762.

15) Quesnay, *Le droit naturel. Oeuvres.* p. 377.

16) Mirabeau, *Philosophie rural.* Amsterdam. 1766. tom. 1. p. 52. 53. cited

七六九年發行の八冊中に表はれた當時の經濟學著作文献簡略報告中、一七五八年の項目にケネーの經濟表は其説明と共に、「經濟的政治の一般格言」の論文と共に一冊となつて *Extrait des économes royales de M. de Sully* の表題の下にベルサイユ宮殿内で印刷され發行された事を述べ、且つケネー自身、此經濟表は一七五八年十二月に出版したと彼に數度物語つたところ、然るにケネーの第一の門弟たるミラポーは翌五九年の出版と云つてゐる、オンケンの考證によればケネーのデヌ、ボンに物語つた言葉を信すべく、ミラポーは彼自身が告げられた時を以て出版の年と考えたので、實際出版は、それより少し前であつたのであらうと云つてゐる、<sup>17)</sup> 此版は不幸にして其跡を絶つたのであるが一八九〇年シュテファン、バウエルが、アルフレッド、シュテルンの教示に基き巴里の國民圖書館のミラポーの遺稿を研究中、其中に偶然發見し再び世に出づることゝなつた、一八九四年ケネーの二百年誕生祭を記念し英國經濟學協會が複寫したものがあつた、オンケンによればそれは前者とは別物であつてオンケンの經濟學史に挿入せるものが前者の初めて世に出た複寫であるとの事である、オンケンは更に又ミラポーの「農事哲學要綱」 *Éléments de la Philosophie rurale* 1767 所掲の經濟表をも複寫してゐる、之はケネーの手になるもので頗る明瞭なのはケネー自身幼時五年間ピエール、ド、ロッシュヌフォールと云ふ銅版屋の徒弟をしてゐたことがあるので彼自身此銅版の製造に携はつたためであらうと云うことである、<sup>18)</sup> 猶之等の他にケネー全集中に收められた「經濟表の分拆」 *Analyse du Tableau économique* がある、<sup>20)</sup> 此中に含まれた圖表は前述のものに比し簡單であり、重要なる考察と題し七つの考察が附けられてゐる。本論稿

by Adam Smith, *Wealth of Nations*, Canner's ed. vol. II. p. 177.

17) Quesnay, *Oeuvres*, p. 155.

18) Oncken, *Geschichte*, S. 324.

19) Oncken S. 325.

は此「經濟表の分拆」に基くものである、猶ケネーの經濟表は最初の公刊に當つて彼の愛護者のボンバードル夫人が其難解のため世人の嘲笑を買ふことを惧れて彼に忠告をしたのであるが、ケネーは此忠告を斥け、彼の友人であり門弟であるミラポーをして通俗的解釋をなさしむること、して、ボンバードル夫人を、やつと承諾せしめたのである、此ミラポーの勞作は彼の有名なる著述 *Année des Hommes* 一七六〇年の附録として出てゐる。

## 二 經濟表と純收入

ケネーの「經濟表」は、ケネーが醫師を本業としてゐる立場から人體の解剖に準らへて經濟社會を解剖し、血液循環の理を移して經濟社會に於ける財の循環を説明したものであると云はれてゐる、前に述べたる如く、ケネーはルキ十五世の侍醫として、又彼の愛護者たるボンバードル夫人の主治醫としてベルサイユ宮殿内に住し、宮殿附屬の印刷工により彼の著述が印刷されたこともある、従て彼の生涯中、經濟現象の考察に興味を有するに至る迄に公にした著述は主として醫學、生物學等に關するものである、彼が經濟現象を考察し初めたのは一七五三年以後、即ち彼が五十九歳以後のことであつて、當時デキデロー、及びアランベールによつて編纂されて居たエンクロペデーに「小作人論」(一七五六)「穀物論」(一七五七)を執筆したが、彼が經濟學的著述を公にした最初である。彼が老年に至つて益々經濟現象の考察に興味を有するに至つたことは彼が經濟表の公刊に際し、ミラポーに與えた手紙の中に、當時の政府が國力の恢復に經濟以外の方

20) Quesnay, Oeuvres, p. 305 ff. 拙譯、ケネー「經濟表の分拆」我等昭和二年十一月號所載 マルクスのケネー研究も亦此經濟表に據る、Marx, Theorien über den Mehrwert, Band I. S. 85. ff.



策に没頭せるを痛惜した言葉があることからも推察することが出来る。

ケネーの「經濟表」はマルクスが「經濟學が今迄負ふ處多き天才的着想」と賞讃し、エンゲルスが「近代經濟學の不可解なるスフィンクス」と呼んだものであるが、「經濟表の分折」は先づ「農業が盛ゆる時は總ての他の技藝も共に榮える、然し原因は何であらうとも耕作を廢するならば他の總ての仕事は地上なると海上なるとを問はず同時に亡びる」と云ふクセノホンの言葉を冒頭に掲げ所謂重農學派の旗幟を鮮明にして、さて「經濟表の算術的形式の分折」から初める。

國民は生産階級 *classe productive* 地主階級 *classe des propriétaires* 不生産階級 *classe stérile* の三階級に分たれる。

(一) 生産階級は土地を耕作して國民の富を年々生産する階級であつて、農業勞働の費用を前拂し、年々地主に所得 *revenue* を支拂ふものである。

(二) 地主階級は主權者、土地所有者、及び十分の一稅徵集者 *Décimateur* を包含し、生産階級が前拂の費用を控除した残りの所得、即ち「純收入」*produit net* を受取つて生活を維持せる階級である。

(三) 不生産階級は農業以外の勞働に従事する人々から成る、彼等の生計は生産階級と地主階級から支拂はれる。マルクスはケネーの所謂不生産階級を直ちに賃銀勞働者 *Lohnarbeiter* と解してゐる、乍然ケネーの此階級は農業に従事する者以外の職業即ち商業、工業等に従事してゐる者を全

21) *Lettres à Mirabeau sur le Tableau économique*, dans Schelle's le docteur Quesnay, Annexes. p. 390.

22) Marx. a. a. O. S. 92.

23) Engels, Herrn Eugen Dührings *Umwälzung der Wissenschaft*. Vorworte. S. XX

部包含するのであるから之を特に賃銀労働者と限定するのは狭きに失するではなからうか。

さて以上は、ケネーの階級の分類であるが此三つの階級間には年々繰返される財の交易がある、蓋し地主階級、不生産階級は自ら食糧品、原料品等を生産せざるものであるから財の交易なしには生活し得ないからである。

ケネーの「經濟表」は更に數種の假定の上に成立する、即ち(一)農業が最高度に行はれ毎年一定の價值が繰返し生産されつゝあること、(二)此價值は商業的諸國民間に行はれる恒久的價格の上に永久的狀態として建てられてゐること、(三)商業上の自由競争と農業耕作上の富の所有の絶對的安全の存すること、之である。<sup>24)</sup>

生産階級は常に農業に従事して年々一定額、例へば五十億法を生産するとする、處が之だけの生産をなすには收穫を齎す迄一年間、農民の食糧品、及び肥料、農具等に前拂をなす必要がある、之を二十億法と見積る、從て之を回收するために五十億法の生産額から先づ二十億法は控除せねばならぬものである、それで殘部の三十億法が、生産階級が他階級に販賣し得るものである。

地主階級も不生産階級も彼等の生計維持のために生産階級から食糧品を買はねばならぬ、此額を各階級十億法と假定する、然るに不生産階級なるものは主として工業的労働に従事しつゝあるものであるから原料を必要とする、之も生産階級たる農民から仰がなければならぬ、之を十億法とする、之で生産階級の一年に生産した五十億法の價值は全部處分が濟んだわけである。

24) Marx. a. a. O.S. 89

25) Quesnay. Analyse du Tableau économique. Oeuvres. p. 309.

さて生産階級の手には他の階級に販賣した代價が三十億法、存在するのであるが、此中、二十億法は地主へ地代として支拂はれ、残りの十億法は生産階級へ工業製品の購買に使用せられる。

地主階級は受取つた地代二十億法を二分して、十億法は前述した通り、自分の階級の生計維持のため農民へ支拂ひ残りの半分に當る十億法は生産階級へ工業製品の購買に支拂はれる。

生産階級は自己の製品を生産階級と地主階級へ十億法づゝ、合計二十億法を販賣し、前述せる如く、其半分を自己の生計維持に、他の半分を原料購買のために生産階級へ支拂ふものである。

斯様にして一年に生産せられた五十億法の價值が三つの階級間に循環するのであるが、此財の循環を圖示したものが「經濟表」である。

處が最初ケネーが階級の分類をなす際に地主階級の中に、主権者及び十分の一税徴集者を含めてゐる、之等の人々は租税の形式の下に其收入を得つゝあるのであるが、重農學派の主張によれば土地のみが收入を發生する根源であるから地主の所得の上之等の租税が課せられる譯である。それ故に地主の所得は實際は二十億法より少いものである、ケネーは主権者の收入を以て地主の七分の二と假定する、即ち五億七千二百萬法で、十分の一税徴集者の收入は他の税金をも込めて七分の一、即ち二億八千六百萬法で、結局、地主の所得は七分の四、即ち十一億四千四百萬法となる、乍然之等の人々も亦、生活維持のため食糧品なり工業製品なりを要し、等しく生産階

級及び不生産階級へ支拂ふことを要するから之を地主の所得二十億法を以て代表せしめても差支はないわけである。

不生産階級は重農經濟の主張によれば年々投下資本を回収し、彼等の生活を維持するに止まり、何等の價值をも生産するものではないのである、工業、商業に従事するものは皆此階級に含まれるが彼等は單に物質に加工するか、之を移轉するに止まり、價値の増殖には無關係なものである。ケネーが商業を以て生産業にあらずとして商人の介在を無用視したことは各所に見らるゝのであるが「經濟表」に附屬せしめた第六考察の冒頭の一句「人々は同じ生産物が數度、商人及び手工業者の手を通過するのを見る、然し循環を無用増加せしめる賣買の斯くの如き繰返しは商品の移轉と費用の増加とを意味し何等の富の生産を伴ふものでないことを注意せねばならぬ、それ故、生産を計算するには、その量と最初の人の手から賣られる價格に限られる」と云つてゐるのは此一例である、従て商業上の費用が財の循環に伴ふとすれば上述の一年の生産額五十億法に猶若干の費用を含めて考慮せねばならぬわけで、ケネーは其合計を六十三億七千萬法と計算し、此詳細に就ては「農事哲學」*Philosophie rurale* 第七章を参照せよと云つてゐる。<sup>26)</sup>

ケネーの門弟ミラポーが巴里ボージラー街の一室に同志の士と週二回會合し、重農經濟の思想を練つたのは此派の歴史の一エピソードであるが、ケネーも亦此會合に出席し約十年も此會は繼續したが、當時ケネーとミラポーとの會話として「純收入」*Produit net*の語が屢々用ひられたこ

27) Quesnay. p. 322.

28) Quesnay. p. 320.

29) Oncken, Geschichte. S. 336. 337.

とは、ケネーの愛護者たるボンバドール夫人の侍女、ホーセーの記録に見ゆる處である、然らば會話の焦點であつた「純收入」とは如何なるものであろうか。答は簡單である、デユ、ボン、ヅ、ヌムールは曰く「收獲から耕作者の回收を引去る時、而して此回收額は翌年耕作の費用を支拂ふため必要であり、家蓄、器具等となつて存在する前拂の資金を永久に維持し行くに必要で、自然が土地の耕作のため其使用を是非とも要求する處の額であるが、其あとに残つたものが純收入である。」<sup>81)</sup>又、此學派の代表者の一人ル、メルシエー、ヅ、ラ、リヴィエールによると「土地の生産物は、總收入」と「純收入」とに分たれる、……「總收入」は其生産に要した總ての費用を負擔すべき責任を含んだ生産物の量であり、此量から此費用を控除した時に、其殘餘となるものが「純收入」である、そは社會にとりての利益である、蓋し社會の富の増加は實に「純收入」に基くのであるから<sup>82)</sup>。

ケネーの「經濟表」によれば農民、即ち生産階級が生産せる五十億法の中、投下資本、即ち前拂したる二十億法と、農業用工具の購買のため工業者、即ち生産階級に支拂ひたる十億法を控除したる殘額二十億法が「純收入」を構成せるもので、此二十億法は前に述べたる如く地代として地主の手に移り行くものである、即ち「純收入」は農業耕作と云ふ生産過程に於て發生し、生産階級から地主階級の財の循環過程に於て地代に變じて地主の手に收納せらるゝものである。

ル、メルシエーは云ふ「耕作者に總ての賠償を與えた後に殘る此「純收入」こそは地主と主權者とに分配せられるべき唯一のものである。」<sup>83)</sup>デユボン、ヅ、ヌムールも亦「此「純收入」は土地の所有

20) Mémoires de Mme du Hausset. p. 71. cité par Moride, Le produit net des Physiocrates et la plus-value de Karl Marx. 1908. p. 14.

31) Dupont de Nemours. De l'origine et des progrès d'une science nouvelle. 1768. ed. par Dubois. p. 14.

32) Le Mercier de la Rivière. L'Ordre naturel et essentiel des sociétés

者に屬すべきものである、……「純収入」が多い程、土地所有者の利益は大である、……全人類の繁榮は「純収入」の大きさに依存する。』「純収入を多からしむるには生産に寄與する勞働をば最も費用少くして使用するにある、而して勞働の費用を可能的に減少せしむるには資本を投下する人と勞働者との間に競争せしむるを要する。」と云つてゐる。以上の引用によつて知らるゝ如く純収入は總収入から生産の費用を控除したもので、地主の所得としての地代を形成するものである。

純収入が總収入より生産の費用を控除した殘餘であるとするならば生産の費用は果して如何なるものから成り立つのであらうか。農業生産の第一の要素は土地である、此土地の借地料は此派によれば、費用を控除した殘餘、即ち純収入を地代として地主に支拂ふのであるから地代は生産費の中に含まれてゐないのである、費用は生産階級が自ら直接に生産に投下するもので之に二種ある、一は元本的投下 *avances primitives* で農具、肥料、家畜の購買、維持等數年に亘りて其効果を繼續すべきもの、支出であつて、二は毎年の投下 *avances annuelles* で生産階級の食料、播種、施肥、收穫、耕作等の勞働に對する報酬である、アベ、ボードーは此外、主權者又は國家の投下、即ち道路、運河等を擧げてゐるが、之等は純収入、即ち地代に課せられる租税によつて支拂はれてゐるから、生産階級そのもの、直接の費用の中には含まれないものである。

生産過程に於て成立した純収入は、以上の如く總収入より生産階級の諸費用を控除した殘餘であるが、更に循環過程に移つて地主の手に納まる、地主の手に入りたる純収入の一部分は租税と

politiques. 1767. (éd. par Depitre. p. 169.  
33) Le Mercier de la Rivière. op. cit. p. 169.  
34) Dupont de Nemours. op. cit. p. 14  
35) Nemours. op. cit. p. 14. 15.  
36) Moride, Produit net des Physiocrates. p. 18

して主権者に移ることは前に述べた如くであるが、更に翌年度の純收入發生の多少は地主及び主権者が如何に此純收入を使用するかによつて決定される、前に述べたる如く、地主及び主権者は彼等の収入を二分し、一は生産階級に、他は不生産階級に支出するものであるが、此二つの使途は全く異なる、『地主が不生産階級に拂ひ、此階級の生活維持に役立たしむる支出と、地主が直接に生産階級に支拂ふ支出とを混同してはならぬ、蓋し地主が生産階級になす支出は、不生産階級になす支出よりも一層農業に有利であり得るから』地主が不生産階級になす支出は以上と全く異なる……それは裝飾の奢侈を構成する』地主が生産階級に對して支出した純收入の一部は農業耕作に使用さるゝことによつて、更に純收入の増加に役立つ、主権者が租税を運河、道路等に使用する時、亦然り、純收入の増加は結局地主階級の手に歸するものであるが、ポードーの云ふ所によれば、地主の手に歸する迄の、生産及び循環の兩過程の中に、地主階級のみならず、他の階級の智識、慾望、享樂等の向上を促すものである、乍然ケネーによれば純收入の増加は單に耕作に對する投資の大小によるのでなく、其處には技術の改良を必要條件とする、耕作用家畜として牛より馬を撰び、小農より大農を奨勵する彼の「穀物論」<sup>37)</sup>一篇は此趣旨に基いてゐる。

以上の叙述に於て知らるゝ如く重農學派の所謂「純收入」は生産過程に於て成立し循環過程に於て實現すること恰かもマルクスの剩餘價值に等しきものがある、前者が純收入を生む勞働を單に農業勞働に限り、工業、商業等の勞働が單に其支出を回收するに止まり、何等純收入を發生せざいと化した體に於てマルクスとは相違するも、共に生産過程の勞働に於て餘分の價值を發生すこ

37) Quesnay, Analyse du Tableau économique. Oeuvres. p. 317.

38) Baudeau, Introduction à la Philosophie économique. 1767. éd. par Dubois. p. 123.

なしたことは軌を一にする、乍ら重農學派の純收入論に於ては生産過程に於て成立した剩餘、即ち此際は穀物等の物質であるが、それが循環過程を通過してゐる中に何時しか貨幣價値に轉化してゐる、此間に貨幣の介在する行程の説明がなされて居ない、尤も生産階級から地主の手に收まる迄、穀物自體であるとも考えられるが、地主が更に之を生産階級に投下する時、所謂 *advances* となるものは最早、物質そのものではあり能はない、此過程の間に不知不識、貨幣價値に移されてゐるのである。更に一步を進めて考えると、此學派には價値の觀念が頗る不明である、彼等の懷抱せる自然法觀は經濟現象の説明にも表はれ、自然物を以て價値を代表せしめて居る、純收入が其本質は價値であるにかゝわらず、彼等にあつては、收獲と投下物との差であり、社會的形式としての價値は看過されてゐる、更にマルクスにあつては剩餘價値が實現されて後、之を受入れるものは勞働の雇傭者であり、資本家であるが、重農學派にあつては純收入は地主の手に集まる、即ち等しく勞働の結果、發生したる剩餘價値の歸屬が兩者、全く異つて居り、重農學派に於ては剩餘價値が唯一の地代なる形式の下に地主階級の手に入る、然し乍ら重農學派に於ては生産階級は農業耕作勞働に従事するものであり、不生産階級は——名稱は不生産ではあるが、之には倫理的に有害な階級と云ふ意味なきことはケネーも云つてゐる、——主として工業的勞働に従事するものであるから、地主階級のみが勞働せずして生活してゐるものである、此意味に於てマルクスが勞働者階級に對立せしめた資本家と同一視して不可なきもので、唯、時代の反映として、ケネーの當時は資本家に代位するものは地主であつたのである。

39) Quesnay, Grains. Oeuvres. p. 193 ff.

40) Quesnay. p. 522.



茲に注意すべきは普通重農學派はケネーの經濟表に従ひ、地主階級、生産階級、不生産階級の三種を以て社會階級の分類となしてゐると考えられてゐることである、乍然ケネー自身も社會階級を此三種にのみ限つてゐるのではなく、之以外に更に數に於て多い下層階級 *Bas peuple*, *petit peuple* が存在することを述べてゐる、唯彼等は消費にのみ携はり、進んで經濟活動に従事するものでないから、經濟表に於ける考察から省かられたものである、然し重農學派の階級觀としては普通、省かれてゐる此階級をも考の中に入れねばならぬものである。

重農學派にあつては、農業生産のみが生産であり、此點より發生する剩餘價值、即ち純收入のみを以て國富増加の根源となすことには後代の學者の非難する處であるが、然し當時の生産状態を見る時、勞働力の多くは農業に用ひられ、然も勞働生産の未熟なる主として自然の力に依據して、人智によること甚だ少かりしものである、『土地のみが富の唯一の根源である』 *La terre est l'unique source des richesses*、<sup>42)</sup>てふ一大格言は當時の生産状態よりすれば寧ろ當然なのである、重農學派も亦、時代の反映と云ふより他なきものである。

學者は往々重農學派が商業を等閑視したことを非難するが、此派は決して商業を無視し、之に説き及ばさなかつたのではない、既に前述せる如く、ケネーは經濟表成立の一假定として富の安全と共に商業上の自由競争の有することを述べて居り、穀物の正當なる價格の有することが農業の繁榮を齎すものであり、その爲めには穀物輸出入の自由が確保されねばならぬことを主張し、就中、穀物輸出商が商業の基本であることを述べてゐる、<sup>43)</sup>重農學派の代表者の一人たる、デュポ

41) Quesnay. *Maximes générales*, Oeuvres. p. 355.

42) Quesnay, p. 337.

43) Quesnay, p. 394.

ン、ヅ、ヌムールは其著「穀物の輸出入に就て」一七六四年刊行に於て特に其第五章を「穀物商業の絶對的自由に由來する農業及び其收入の増加に就て」と題し、商業の重要性を説いてゐるのである。<sup>(44)</sup>ケネー自らも「正當なる價格は農業を良好ならしむるのみならず、正當なる價格こそは農業が獲得したる富を構成するものである、麥の一定量の價値は富として考察され、その價格の中に成立する。」<sup>(45)</sup>と云ひ、生産過程に於て作り出された穀物が、循環過程に於て人々の手を潜ることによつて、即ち商業の中に價格となり富を形成するに至ることを述べてゐるのである、彼等によつて商業が無視され、全く説き及ばれなかつたと見るのは誤解であることは以上によつて明瞭であらう。工業も亦、當時の生産状態から見れば、その多くは手工業 *main-d'oeuvre* の範圍を出でず、農業生産に比し、甚だ不振の状態にあつたことは想像するに難くないから、從つて當時の學者の目に農業の如く深く映じなかつたものと見るべきであらう、學説は時代の反映である、其背景を無視して、之を難するは酷である、寧ろマルクスの重農派觀の如く學説の内在的批判をなすことか同情ある觀方と云ふべきであらう。唯重農學派が彼等の生産方法を以て歴史的社會的產物と見ず、之を絶對視し、永久視したことは、正統學派の人々の考察方法と共に非難さるべきことであらう。

44) Dupont de Nemours. De l'exportation et de l'importation des Grains. 1764. éd. par Depitre. p. 19. ff.

45) Quesnay, p. 246.